

境也、各獻和歌云々、菅原朝臣絕句曰、滿山紅葉破、心機況遇浮雲足、下飛寒樹不知何處去、雨中衣錦故鄉歸、廿九日、欲向住吉濱、爲惜素性法師歸本寺、留連未能發行、勅群臣、令獻惜別之歌云々、歌終施法師御服少衣一襲、細馬一匹、法師數盃之後、兼感恩賜、著御衣騎御馬、向山直去、侍臣惜而群立目送、人々以爲、今日以後、和歌興衰矣、卅日、月盡也、管絃相隨、雖無下燈飛帆之儲、頗得乘潮駕浪之趣、又各獻和歌云々、著於江北、下舟騎馬、詣住吉社和歌云々、十一月一日、午刻始向京都、申時到楓河西善朝臣小家、暫待昏景、兩三刻後、歸幸朱雀院、賜陪從群臣酒饌并絹、別加給親王大納言參議御厩駿馬一匹、群臣入夜、各々分罷、嗟乎人意不同、譬猶其面相從者見質、以爲頌歎、不相從者聞虛、以爲誹謗、世之常也、不可恠之、廿一日、右大將菅原朝臣記之、依多略之、○又見帝王編年記

〔後撰和歌集十九〕法皇宮の瀧といふ所御らんじける御供にて

菅原右大臣眞道

水ひきの玄らいとほへておるはたを旅のころもにたちやかさねん

〔日本紀略一〕昌泰三年十月某日、太上天皇、○字幸近江國筑扶島

〔西宮記臨時五〕太上天皇御幸

延喜七年十月一日、使道明仰左大臣○藤原曰仁和寺多字可御紀伊國、若可有所申否、大臣令申云、

勘前例、清和太上天皇御平城時、能有朝臣等、引宿衛奉從、又前時法皇行幸時、友于朝臣奉從、今以爲奉遣參議少將等、可善、抑明日參入、可定仰云々、二日、使仲平朝臣奉問途中云々、十八日、拜伊勢、賀茂上下、松尾、石清水、春日、平野、住吉、日前等神、祈法皇道中平否、曰、召河內守安在王於藏人所、令管根朝臣、勘太上天皇還御之間、供奉闕怠狀云々、

〔大和物語〕亭子の帝○字多の御供に、おほきおと○藤原忠平大井につかうまつり給へるに、紅葉小倉山に色々いとおもしろかりけるを、かぎりなくめでたまひて、行幸もあらんにいとけうある